

佐々木学長(前列中央)、廣瀬審査員長(同左)らと受賞者の皆さん



商・池部ゼミ 商・神原ゼミ

2チームに学長賞

SDGS チャレンジプログラム

「専修大学SDGSチャレンジプログラム2021」の表彰式が12月18日、対面とオンラインを併用した形式で開催された。SDGS達成に向けたアイデア(提案)を募集するアイデアコンテストでは商学部・池部亮ゼミ「ECO-FRIENDLY PROJECT」が、具体的なアクション(実践報告)を募集するアクションコンテストでは商学部・神原理ゼミ「大麦ストローのある暮らし」がそれぞれ学長賞を受賞した。

2回目の開催となる今年度は、書類審査とプレゼン審査の結果、7チームが入賞した。齋藤由莉さん(商3)ら「ECO-FRIENDLY PROJECT」のメンバー5人は、オンラインの再利用型テイクアウト容器「WAPPARS」を飲食店に普及させることで社会全体のプラスチック排出量を抑制するアイデアを提案した。「大麦ストローのある暮らし」は、リーダーの

■ アイデアコンテスト

学長賞	商・池部亮ゼミ	ECO-FRIENDLY PROJECT ~デポろう!プラスチック~
校友会会長賞	sakura-run	SOS project
育友会会長賞	商・鹿住倫世ゼミ	フードロスムービー — 飲むだけで始めるSDGs —
グッド・SDGs アイデア賞	商・池部亮ゼミ	Cảm ơn!(ありがとう!おいで!) Vietnamese
	sakura-run	ギガペーパーレス

■ アクションコンテスト

学長賞	商・神原理ゼミ	大麦ストローのある暮らし
校友会会長賞	商・神原理ゼミ	ゼミで行うフェアトレードの啓蒙活動

審査員を務めた廣瀬玲子文学部教授は表彰式で、「SDGS達成に向けた活動は世界に目を向け、問題を直視することから始まる。皆さんの提案や実践が広い視点に立つものであったことを頼もしく、さすがに感じました」と講評を述べた。佐々木重人学長は、「どのアイデア、アクションも練りに練られて完成度が高かった」と評し、「コロナ禍でさまざまな制約があるなか、目標に向かい結果として取り組んだ皆さんの姿勢が、このプログラムの存在意義を高めてくれた」と学生たちに語りかけた。

再利用型容器の普及を目指す

アイデアコンテスト 商・池部ゼミ

国内のプラスチックごみの多くを容器包装が占めることに着目し、「WAPPARS」を考案した。伝統工芸品「わっぱ」をモチーフにした容器デザインが名の由来。

サービスはサブスク制で、テイクアウト利用者は容器返却時に割引クーポンなどがもらえる。サブスクやクーポンにより再来店が促進されるため、導入する飲食店側にもメリットがある。

プランをまとめるにあたり、神保町周辺の約20店でアンケートを実施。現場の声を価格設定などに反映させ、説得力と実現可能性を高めた。齋藤さんは「事業を計画するうえで貴重な経験になった」と話すとともに、「SDGSは人ごとではない。今回の活動を通じて自分の生活や意識にも変化が生まれた」とプログラム参加の意義を語った。



受賞の感想を述べる齋藤さん

SDGs×マーケティングに挑戦

アクションコンテスト 商・神原ゼミ

自然由来で再利用可能な大麦ストローを社会に根付かせるため、「大麦ストローのある暮らし」をコンセプトにしたプロジェクトに取り組んでいる。

神田キャンパス10号館1階の「SENDAIKAFFEE」で開いたイベントでは、大麦ストローの無料提供や関連グッズの販売を行った。授業で学んだマーケティングの知識とSDGsを掛け合わせることで、訴求力向上を図ったと中橋さん。ポスターをはじめとしたプロモーションツールは、消費者の購買心理プロセスを踏まえて配置するなど工夫した。

会場には多くの人が訪れ、イベントの様子はさまざまなメディアで取り上げられた。ゼミ生が製作した大麦関連グッズは石川県内のカフェや道の駅でも販売されるなど、活動の輪は着実に広がっている。



イベントで大麦ストローの提供を行った11月6日

ベンチャービジネスコンテスト 菅原チームが鳳賞

第20回専大ベンチャービジネスコンテストのプレゼンテーション大会が12月4日、神田キャンパスで開かれ、最優秀賞にあたる鳳賞に菅原祐嗣さん(商3)のチームが選ばれた。

今回は31組が応募し、書類審査と事前プレゼン審査を通過した10組が本戦に臨んだ。出場者は、起業家や教員など13人の審査員を前に堂々とビジネスプランを発表した。菅原さんのチームは、昆虫の売買に特化したマッチングプラットフォーム「ムサビ」を提案した。過去に昆虫の売買でトラブルに遭った自身の経験と、SNSで交流して集めた愛好家の声を踏まえ、ユーザーが安心して

取引を行える透明性の高いサービスを追求。チャット欄を設けて情報の見やすさを図ったほか、配送途中で生体が死んでしまった「死着」対策として、このほか、過去に現在の自分を手紙でつなぎ、自己肯定感を高めるサービスを考案した長谷川実穂さん(経営3)のチームが優秀賞を、遠隔地から音声を届けてライブの一体感を演出するサービス「ライブ」を提案した大嶋美穂さん(経済3)が育友会長特別賞を受賞した。



菅原チームの熱のこもったプレゼン

で、死着補償という仕組みも用意した。商学部でビジネスプランニングなどを学ぶ菅原さんたちは「どこまでやれるか確かめたい」と、コンテストへの参加を決めた。鳳賞獲得に驚きつつも、「チームワークが実を結んだ」「自信が詰まった」と笑顔を見せた。

このほか、過去に現在の自分を手紙でつなぎ、自己肯定感を高めるサービスを考案した長谷川実穂さん(経営3)のチームが優秀賞を、遠隔地から音声を届けてライブの一体感を演出するサービス「ライブ」を提案した大嶋美穂さん(経済3)が育友会長特別賞を受賞した。



文学部ジャーナリズム学科プロジェクト 「専修Jスポ」発行

文学部ジャーナリズム学科では、2年次生が「プロジェクト」というアクティブラーニング科目に取り組んでいる。学生同士や教員で意見やアイデアを出し合い、内容を作り上げていく。後期の齋藤実教授のプロジェクトでは、スポーツ新聞を企画。学生12人が構成を考え、取材、撮影、原稿作成やレイアウトなどを全て担当し、12月15日、「専修ジャーナリズムスポーツ」通称「専修Jスポ」が完成した。

一般的な新聞と同じサイズのプロケット判8ページ。1面には「専大箱根駅伝出場」の大見出しが躍る。最終面でスピードスケートの森重航選手(経営3)のワールドカップ初優勝を報じたほか、活躍著しい部や選手を取り上げている。齋藤教授は「履修生には体育会に所属している学生もいれば、報道に興味がある学生、デザインに関心がある学生もいる。専大のスポーツと一般学生を結びつけ、スポーツの魅力を伝える『Jスポ』の完成した」と語る。

学生たちは手分けして取材を行った。編集長の野見山拓樹さんは「入念な下調べをしてインタビューに当たった」と話す。締め切り直前に飛び込んできた森重選手のW杯優勝の報。レイアウト担当だった横山花音さんは「時間がない中でも形になってよかったという安堵感と、もっと工夫できたいのではないかという思いがある」と語る。

キャンパス内で配布されているほか、QRコードからダウンロードできる。

カレンダーコンテンツを制作した岡本太郎美術館チーム



川崎市岡本太郎美術館チームはオンラインコンテンツの企画制作・広報を実行。作品や岡本太郎のポトレートと数々の名言を集め、岡本太郎と過ごす2022年TAROCALENDARを作ろう」と題して公開した。メンバーは「岡本太郎の力強い名言で、コロナ禍の人々を勇気づけた」と語った。

課題解決型インターンシップ 成果発表会をウェブで公開

本学独自の長期インターンシップ「課題解決型インターンシップ」は、地域の企業や団体などが抱える課題に学生が主体的に取り組み、解決策を提案するものだ。今年度は14のテーマ活動を行った。川崎市岡本太郎美術館チームはオンラインコンテンツの企画制作・広報を実行。作品や岡本太郎のポトレートと数々の名言を集め、岡本太郎と過ごす2022年TAROCALENDARを作ろう」と題して公開した。メンバーは「岡本太郎の力強い名言で、コロナ禍の人々を勇気づけた」と語った。



「専修Jスポ」のQRコードからダウンロードできる。